

Karl A.E. Enenkel (ed.), *The Manipulative Mode, Political Propaganda in Antiquity: A Collection of Case Studies*, Leiden: Brill, 2005. Pp. 318.

ISBN90-04-14291-6.

廣川 晶子

本書は、ライデン大学で古典文献学を研究しているK・A・E・エネンケルが、古代ギリシア・ローマにおけるプロパガンダをテーマに編んだ論文集であり、序章と九篇の論文から成る。その内訳は以下の通りである。

序章

第一論文：I・L・プファイファー「ピンダロスのピュティ

ア第一祝勝歌におけるプロパガンダ」

第二論文：S・R・スリングス「民主政期アテナイ（五

〇—四〇〇年）の合唱コンテスト」

第三論文：C・カーリー「アテナイでの演説におけるプロパガンダと競争」

第四論文：R・ストルツマン「ケルトに対抗した王たち—ヘレニズム王家のプロパガンダにおける主題としてのバルバロイからの救出」

第五論文：S・ブッシュ「我々」とは誰か？—カエサル

『ガリア戦記』におけるプロパガンダのメカニズムと執筆意図をめぐって」

第六論文：K・A・E・エネンケル「叙事詩における予言は皇帝のプロパガンダか？—ウエルギリウス

『アエネイス』におけるユピテルの第一予言」

第七論文：P・G・P・メイブーム「帝国の伝統の創造—アウグストゥスの住居のイデオロギー的側面」

第八論文：K・A・E・エネンケル「勇敢」の流布—剣闘士競技とローマ文学への影響（前八五年頃からトラヤヌス期まで）」

第九論文：S・ドゥビア「賞賛演説における創作—『ラテン頌詞第五』の修辞学的分析」

以下、本書の構成に従って紹介していく。

\*

編者は序章において、当該テーマに関してこれまで研究者たちが議論の出発点としてきた研究視座にまず注意を喚起している。というのも、古代のプロパガンダが現代のそれと同じような方法で機能していたという認識を、論者らの多くが無自覚に当てはめてしまいがちだからである。そのよい例が貨幣である。貨幣は、それを使用する者に統治理念を伝達し、支配者と被支配者のあいだで共通認識を形成する重要な役割を担っていたと長らく信じられてきた。しかし最近では、古代世界において貨幣がどの程度流通していたのかという問題や、一般の使用者がどの程度まで貨幣をプロパガンダの道具として認識し、そこに描かれている内容を理解できていたのかといった問題が提起されている。このような問題提起は、貨幣だけに留まらず、これまで政治宣伝の道具の一つと見なされていたモニュメントや壁画などについてもなされている。さらに編者が指摘するには、ナチスが一党独裁体制下で行ったような、自分達に都合の良いプロパガンダを一方的に市民に押し付けるやり方は、古代ギリシア・ローマにおいて用いられることはなかったという。なぜなら、古代ギリシア・ローマにおけるプロパガンダは、もっぱら同じ社会的地位にある人々の支持を得るためのものであり、自分の意見を無理に押し付けるようなことがあれば強い反発を受け、自らの立場を危うくしてしまう恐れがあったからである。ここから編者は、古代のプロパガンダ研究において、ナチズムやスター

リニズムによって形成された二〇世紀のプロパガンダのイメージを安易に投影させることなく、古代のプロパガンダをその時代や社会の文脈のなかで再検討する必要があると説いている。

\*

詩人ピンダロスが「ピュティア第一祝勝歌」で、前四七〇年のピュティア祭での戦車競技に優勝したヒエロンを讃えようとしたことは周知の事実であるが、第一論文の筆者プファイファーは、この祝勝歌が勝者を讃える頌歌であるというよりも、シチリアの僭主ヒエロンの支配を正当化し権威づける意図のもとに書かれたプロパガンダの歌であり、「ピュティア第一祝勝歌」の序歌で描かれている神話の場面がそれを証明するのに機能していたと主張している。

序歌で描かれる神話の主役は神々の王ゼウスである。序歌ではまず、音楽の神アポロンと芸術の女神ムーサイたちが平和の中で奏でるリュラの神聖な調べと、心穏やかにそれに聴き入るゼウスの姿が描かれる。しかし、次の場面では一転してオリュンポスの神々に抗う巨神テュポスを圧倒的な力でもって打ち倒すゼウスが描かれる。この二つの対照的なゼウスの姿を描くことで、ピンダロスは序歌において、音楽の中では穏やかな神ゼウスが、一旦敵によって平和を壊された時は、容赦せず、無慈悲なまでの力で相手をねじ伏せることを強調している。その一方で、「ピュティア第一祝勝歌」の本歌末尾部分においては、ヒエロンの過去の武勇を称え、平和

をもたらすヒエロンが、敵に対しては圧倒的な力を発揮することが対照的に描かれている。すなわち、ピンドロスの「ピューティア第一祝勝歌」は、聴衆に、ゼウスとヒエロンのイメージを重ね合わせようとしていると筆者は説く。

このように、神々の王ゼウスと重なり合ったイメージを持ったヒエロンは、僭主という存在につきまとう非法法のイメージを払拭し、「王のなかの王」「傲慢を罰する者」「ギリシアの救世主」という権威と正当性を持つ肩書きを認められるようになる。彼の支配に服する者に対しては平和が、敵対する者に対しては破滅が、神ゼウスのごときヒエロンによってもたらされるであろうことが、歌という文化的な媒体と神話という架空の体裁を通して、婉曲的かつ印象的に仄めかされているのである。

序歌の神話は、神ゼウスの統治権を奪取しようとした巨神テュポスが、ゼウスによって打ち倒され、シチリアの地下深くに閉じこめられたと語る。シチリアの活火山として有名なエトナ山が噴火するのは、地下に閉じ込められているテュポスの怒りと不満が爆発するからだという。興味深いのは、このエトナ山の麓にある都市アエトナの創建者が他でもないヒエロンであり、都市の守護神がゼウスだという点である。さらにピンドロスの「ピューティア第一祝勝歌」が披露されたのもアエトナであった。ここから、ゼウスとヒエロンとの結びつきを演出する意図的な作詩と舞台設定がなされていたということがわかる。この意味で「ピューティア第一祝勝歌」は、

筆者が主張するように、ヒエロンの僭主としての正当性を確立するために構成されたプロパガンダの歌であったと言えるだろう。

\*

第二論文の筆者スリングスは、合唱コンテストについての文学史料や碑文史料を再調査し、前五世紀初頭のアテナイにおいて合唱コンテストがプロパガンダとして機能していたのか否か、していたとすればどのような目的が込められていたのかについて考察している。

筆者によると、合唱コンテストは、ディオニュシア祭やタルゲリア祭などで催されていた行事の一つであり、壮年男性あるいは青年で構成された合唱団によって行われるものだった。ディオニュシア祭では、悲劇や喜劇のコンテストも行われていたが、合唱コンテストの平均上演時間が一時間だったのに対して、悲劇は丸一日かけて、喜劇は二時間かけて上演されていたという。このように、上演時間で比べれば、合唱コンテストは軽視されていたようにも受け取れるが、しかし、合唱団に支払われる費用は、喜劇や悲劇よりも高額だったという。当時の人々（リュシアスやデモステネスなど）がこうした扱いを当然のことととらえていたことから筆者は、ディオニュシア祭のメイン・イベントは悲劇で合唱コンテストは余興に過ぎなかったという従来の説を否定し、合唱コンテストの重要性に注目している。

これまでの研究史において合唱コンテストは、対外的には

他のギリシア国家に対しアテナイが文化的存在であることを知らしめ、対内的にはクレイステネスの改革によって形成された十部族間のより強い団結を促すという機能を有していたと考えられてきた。こうした解釈について筆者は、合唱団を構成するメンバーや主催費を出すコレゴスの選出システムに着目し、合唱コンテストがプロパガンダとしての役割を果たしていたか否かについて再検討を行っている。

筆者は、文学史料や碑文史料を分析し、ディオニュシア祭では古くから合唱コンテストが行われていたこと、タルゲリア祭での合唱コンテストは、クレイステネスの改革の一二年前にディオニュシア祭を参考にヘルミオネのラソスによって私的に開始されたことを確認し、さらに、ディオニュシア祭とタルゲリア祭での合唱コンテストの優勝記録を分析して、先に始まったディオニュシア祭での合唱コンテストの優勝の名誉が各部族のものと考えられていた一方で、タルゲリア祭ではコレゴス個人が優勝者として考えられていた点を指摘している。

以上の点から、合唱コンテストとクレイステネスの十部族との関わりは、改革のちに数十年かけて徐々に形成されたものであり、したがって、合唱コンテストが当初からプロパガンダとして存在していたというよりは、十部族との関わりが深くなるにつれて、プロパガンダとして機能するようになったと筆者は結論付けている。

\*

古代ギリシア人は、「プロパガンダ」そのものを指す言葉は知らなかったが、世論や政策を形成する試みに相当する言葉は知っていた。第三論文の筆者カーリーによれば、この試みのことをギリシア人は「説得」という言葉で表現していたという。そこで筆者は、その当時もともと自己表現を行う機会があり、語彙も豊富だったアテナイに焦点をしぼり、公的な場での「説得」と「プロパガンダ」の相関について考察している。

徹底した民主政を敷いていたアテナイでは、市民とかけ離れた存在としての政府は認められてはいなかったため、政府による情報操作の余地は自ずと限られていた。このような状況下で、自らの意見を普及させる主要な方法の一つが演説であった。筆者は個々の演説の役割に注目し、それぞれの演説が人々にどのような作用を与えていたのか検討している。

まず、戦没者を送る国葬の際の追悼演説は、市民としてあるべき姿を示すことで国家に尽くすことへの賞賛や帰属意識の高揚を促すというものであった。評議会や民会での政治演説は、自分の意見に賛同するサクラを利用しながら、自らの政治思想への賛同者の支持や反対者の黙認を増やすものであった。更に法廷における弁護演説は、相手を個人的に中傷し、評判を傷つけることで相手の主張の信憑性を削ぎ、反対に自分の側の主張が認められるようにするものであった。

各場面におけるこうした作用を検討した後に筆者は、個々の具体的な事例をつぶさに調査し、演説のプロパガンダとし

ての重要性を強調する。とりわけ前五世紀後半以降になると、政治の場において武勇が持つ影響が低下し、その一方で言葉を操り他者を説得する能力が重要なものとなっていったので、演説は自分の考えを広め世論を形作る、時代によく適応したプロパガンダの方法となったと筆者は結論している。

\*

前二八〇—二七九年のケルト族のギリシア侵入以来、ケルト族は地球の果てに住む獐猛で野蛮な民族で、文明化された世界を脅かすものとして、ギリシア世界では長らく観念されてきた。筆者ストルートのマンは、このようなケルト族のイメージがヘレニズム諸王国においてどのようなプロパガンダとして利用されていたのかを論証している。

前二八一年マケドニアの覇権を巡るセレウコスとリュシマコスの争いが頂点に達した後、ギリシア世界は混乱に陥り、非常に不安定な状態となっていた。そのような状況下で前二八〇年にマケドニアに侵入を果たしたのがケルト族であった。一時は北アイトリアのカリオンによって負かされ、離散するが、そのうちの一派がデルフォイに侵攻した。この時、アイトリア連盟はケルト族を撃ち負かし退去に追い込むことに成功した。それまでのアイトリア連盟のイメージは信頼できない後進国といったものであったが、アイトリア連盟はデルフォイでの功績が認められ、この勝利を記念して開催されるようになったパンヘレニックな祭、ソテリア祭の主導権を握るようになった。デルフォイでケルト族に立ち向かったの

はアイトリア連盟だけではなかったのであるが、にもかかわらず、彼らがソテリア祭を支配し、それと同時にギリシアの中心となっていた背景には、彼らのプロパガンダ戦略が強く影響していたと筆者は見る。

アイトリア連盟は、この戦いで手に入れた戦利品の殆どをテルモンにある連盟の聖域に奉納し、アポロン神殿の外にはケルト族からの戦利品の上に座す女性像を建立した。更に、ペルシア戦争後にアテナイ人たちが奉納した戦利品の向かいがわに自分達の戦利品を飾り、アテナイ人たちの過去の栄光と自分達の栄光を重ね合わせることによって、ソテリア祭をデルフォイだけでなくギリシア世界全体が守られたことを祝う祭りに仕立て上げるとともに、アイトリア連盟を全ギリシアの守護者という地位に押し上げて、ソテリア祭の主導権だけでなく、政治や軍事の面においても優越を認められるようになっていった。

王たちはこのアイトリア連盟のやり方をまねていった。ヘレニズム初期に、パンヘレニズムの観念はマケドニア国家の主要観念へと発展していき、王はヘレニズム文化や国家の守護者、指導者として振舞った。ケルト族を討ったアンティゴノス・ゴナタスはその功績のため最初にソテルの称号を与えられ、王として認められたが、後の王たちも彼に倣っていくようになった。

ケルト族の侵略は、先のペルシア戦争に比べれば大した脅威ではなかったという。しかしデルフォイは、ギリシア第一

のパンヘレニックな聖地であり、地球の中心を象徴する場でもあった。それゆえ、デルフォイへの冒険は全人類に対する脅迫と考えられていた。世界の果てからやってきたケルト族の侵略はギリシア世界にとって非常な衝撃を与えたのである。この感情的なショックが、デルフォイを守ったアイトリア連盟やマケドニア王家によって政治プロパガンダとして利用されるようになったと筆者は結論している。

\*

第五論文は、カエサル『ガリア戦記』が戦況をどのように記述しているか、また、どのような人々を対象にして書いているのか、その執筆意図は何であったのかを明らかにすることによって、同書がプロパガンダの書であったこと、すなわち、政治的にカエサルと対抗していた人々の非難に対する返答の書であったのかどうか考察している。

『ガリア戦記』を一読してまず気づくことは、第三者によって書かれているかのような体裁（主語が「彼は」という三人称単数形になっている）をとっているということである。筆者は、これまでの研究がこの第三者の語り手という問題を無視しがちであった点を指摘し、更に、この語り手が自分自身を表わす時、一人称複数形の「我々は」も使用しているという奇妙な現象に注目して、語り手がどのような社会身分に属しているのか、誰を対象にどのような意図で書いているのかを分析している。

『ガリア戦記』のなかで使用されているラテン語の「我々は」

(nos) には、文脈によって二つの意味があり、一つは「我々ローマ人は」という、語り手を含むローマ市民全体を指すもの、もう一つは「我々ローマ軍兵士は」という、軍事作戦に携わっている者たちを指すものである。筆者によれば、語り手は、自身を市民や兵士の一人として位置づけることで、客観的に事実を語っているかのような印象を与えることに成功しているという。また、三人称単数形が用いられていることについて筆者は、一人称単数形の使用を避けることによって、語り手があたかも読者の一人として出来事を見ているかのような印象を与え、文章に客観性をもたせると同時に、將軍としてのカエサル自身の行動や決定に対する読者の非難をかわしているとしている。

次に筆者は、『ガリア戦記』の場面が軍事行動に及ぶ時には記述の曖昧さが目立つが、一方で、場面が兵士の武勇に及ぶ時には生き生きとした描写がなされていることを指摘し、ここにカエサルのプロパガンダを見て取っている。すなわち、カエサルは共に軍事に従事している兵士たちを称えることで、自分に対する兵士たちの忠誠や支持を得ようとしていたと主張するのである。この主張から筆者は、『ガリア戦記』の読者層を従来の見解より広く考え、兵士たちや部外者たちを物語の対象読者として考えるべきであると重ねて主張している。そして一人称複数と三人称単数を巧みに使い分けることで読者を話の外に置くのではなく、話の一部に組み込み共感と支持を得ようとしたものであると結論づけている。

\*

これまで『アエネイス』は、ウエルギリウスの政治意見を読者に提示するためのものであるとか、アウグストゥス帝を賞賛するためのものである、といった具合に様々に解釈されてきたが、本論文の筆者エネンケルは、『アエネイス』第一巻二五七に見えるユピテルの予言にとりわけ注目して、この叙事詩の執筆意図を考察している。

エネンケルはまず、J・オーハラによる予言の解釈を批判する。オーハラは、ウエルギリウスが『アエネイス』の中で二度ロムルスとレムスについて述べているところに注目しているが、アウグストゥス帝がロムルスとレムスの話を内乱と結び付けていることから、二人の話を否定的に解釈している。すなわち、ウエルギリウスがロムルスとレムスの話を持ち出すのは、アウグストゥス帝のもたらした「平和」の観念に信頼を置けず、もたらされた平和を不正なものと考え、これまでの平和とは異なったものであることを明らかにしたいからだと主張するのである。これに対してエネンケルは、アウグストゥス帝が自らを新しいローマの創始者としてロムルスとの繋がりを強調していることを指摘し、オーハラの主張を強く否定している。

一方で筆者は、四世紀後半から五世紀に活躍した著述家マクロビウスの『サトゥルナリア』に記されているウエルギリウスをめぐる議論に注目し、ウエヌスとユピテルの予言が

ウエルギリウスのオリジナルではなく、前三世紀後半のナエウイウスの叙事詩『ポエニ戦争』を模したものであると論じている。ウエルギリウスは、エリート層によく知られていたナエウイウスの作品とりわけ事実を物語った歴史物を模すること、で、『アエネイス』の読者に『ポエニ戦争』の予言を思い出させ、『アエネイス』の予言の信憑性を高めようとしていたと筆者は主張している。

更に筆者は、この予言の中でヤヌス神殿の門が閉じられる点に注目する。アウグストゥス帝は実際に、内乱の勝利後に三日間もの凱旋式を行っていたが、その最後を飾る儀式がヤヌス神殿の門を閉じるというものであった。ウエルギリウスはヤヌス神殿の門が閉じられたという事実を予言の中に組み入れることで、読者に予言の信憑性を、さらには平和の達成意識を植え付けていると筆者は結論している。

ただし、論中で筆者も認めているように、ナエウイウスの文章が残っていないため、ウエルギリウスのユピテルの予言がナエウイウスの『ポエニ戦争』を模したものであるとする主張には一定の留保が必要だろう。

\*

アウグストゥス帝がローマに建立した多くの建物やモニュメントは、彼の政治思想を浸透させるためのプロパガンダ装置であったと一般に解釈されているが、これらの建造物に込められたアウグストゥス帝の本当の目的ははっきりとせず、未だ議論の対象となっている。第七論文の筆者メイブームは

こうした研究状況を踏まえて、パラティヌスの丘の南西側で発掘された、アウグストゥス帝の「控えめな家」とみなされている住居に着目し、それが内包するプロパガンダ的側面を考察している。

アウグストゥス帝はパラティヌスの丘に住居を構えていたが、ここはロムルスの家があったと考えられている場所の一つであった。もう一つの候補地は、フォルムに近いカピトリヌスの丘であったが、アウグストゥス帝はパラティヌスの丘の方を選んだ。パラティヌスの丘の方がローマの建国譚に直接結びつくことができ、ローマの支配者としての正統性をより強めることができると考えたためである。伝承によれば、前十二世紀にエウアンドロスとアルカディア人たちが英雄ヘラクレスに助けられながら移住してきて、パラティヌスに都市を建設したのがローマのそもそもの始まりであった。その後、ローマの始祖アエネアスが長い漂泊を経てたどり着いたのも同じパラティヌスであった。要するに、彼ら全てと関わり深い場所がパラティヌスの丘なのである。アウグストゥス帝がカピトリヌスではなくパラティヌスに住んだのは、そうすることでローマ建国にかかわる父祖全員との繋がりを得ることができたからだと言筆者は推測している。

アウグストゥス帝の「控えめな住居」は、建国伝承との結びつきだけでなく、神話との結びつきをも求めていく。始祖アエネアスの母親と同一視されていたキュベレ女神の神殿や同じく始祖アエネアスの母親ウエヌス・ゲネトリクスとの結

びつきが強いウィクトリア神殿の近くに住居はあるのである。また以前からアウグストゥス帝の守護神とされ、アウグストゥス帝自身として表されることもあるアポロン神の神殿も住居に程近い場所にあった。

またアウグストゥス帝は、前十二年に大神祇官に任命されると、本来であればフォルムの公邸で執務するべきところをそうはせず、彼の「控えめな住居」の一部を改修して、そこで大神祇官の務めを果たしたという。更には、家の入り口にウエスタの聖域を造らせて、フォルムの宗教空間と類似のプランをパラティヌスの丘に現出させたのであった。

以上のように、アウグストゥス帝の「控えめな住居」は、始祖アエネアスが到着したパラティヌスの麓を見下ろせるところに立っているだけでなく、住居の周りを神殿や神域で囲み、神話との結びつきと神々の後ろ盾を持っていた。このため、パラティヌスの丘の住居はアウグストゥス帝にとって新しいローマの支配者としての正統性を強めるものであったと言筆者は結論している。

\*

第八論文の筆者エネンケルは、剣闘士競技を通して古き良きローマ人の価値観を取り戻すべく努力した二人の皇帝、すなわちアウグストゥス帝とトラヤヌス帝にとりわけ注目して、剣闘士競技をプロパガンダの観点から再検討している。

アウグストゥス帝とトラヤヌス帝の二皇帝は、それぞれローマ人の古き良き価値観を取り戻そうと剣闘士競技を開催



した。アウグストゥス帝は、内乱が終結しローマに平和が訪れたことで、人々が古き良き価値観を忘れ軟弱になることを危惧し、国家主導のもと剣闘士競技を積極的に開催した。彼が記した『業績録』の中でも自らを剣闘士競技の熱心なサポーターとして描いている。またその治世中に十六回も剣闘士競技を開催したことを誇りにしている。一方のトラヤヌス帝も、古くからのローマ人のモラルを生き返らせ徳を活性化させようと、ローマ史上最大規模・最長期間の剣闘士競技を開催し、小プリニウスは剣闘士競技の主催者としてトラヤヌスを称えている。この二人の皇帝が剣闘士競技を通して人々に植え付けようとしたのが古くからある徳の一つ、〈勇敢 fortitudo〉であった。筆者は、〈勇敢〉がその当時の人々にとってどのような価値をもっていたのか、そしてこの観念が剣闘士競技とどのように結び付けられていたかを問うている。

キケロが『想案論』の中で、〈勇敢〉を理性的な思考と関連づけて理解していることからわかるように、この観念と結びついていた剣闘士競技や剣闘士もまた、理性的存在あるいはモラルの例と見なされていた。事実キケロは、血にまみれた野蛮な剣闘士すべてを無条件で肯定するものではなかったが、勇敢さは理性的行動を必要とするのであるから、その意味で強い剣闘士は、感情ではなく冷静な判断で戦っている<sup>①</sup>と見なし、剣闘士をモラルの模範とすることを躊躇わなかった。一方セネカは、彼の著書『怒りについて』で、剣闘士の勝敗は分別にかかっているとし、剣闘士をストア哲学が求め

る偉大な事例または宣伝者と見なしている。

筆者は結論として、アウグストゥス帝とトラヤヌス帝は、ローマの平和によって人々が無気力になり、勇敢さを失ってしまうことを恐れたため、人々に剣闘士のように痛みや死を恐れない真の男として振舞うよう剣闘士競技を通して〈勇敢〉の価値観を学びなおしてもらおうとしたと主張している。

\*

三一年にアウグスタ・トレウェロルム（現トリア）で開かれる即位五年祭に向け、アウグストドゥム（現オータン）出身のある雄弁家が、コンスタンティヌス大帝を称讃する演説を執筆した。筆者デュビアは、エネンケルの先行論文<sup>②</sup>に基づき、頌詞の第六と比較しつつ、頌詞の第五の分析、解釈を行っている。

エネンケルによれば、頌詞の第六は、コンスタンティヌス大帝のこれまでの五年間の治世を、お世辞を込めつつ概略したものであるが、この頌詞の第六には、政治的に危険な要素もいくつか組み込まれていたという。例えば、コンスタンティヌス大帝の権力の正当性を明示するために、彼の父コンスタンティウス帝からの権力譲渡とその血統が強調されている。王朝において血統は正当性を得るために必要なキーワードであるが、世襲制ではない四分統治体制においては避けるべき要素であった。ここから筆者は、称讃演説者は皇帝を称讃する項目を比較的自由に選別でき、また、新しいイデオロギーを試す機会を得ることができたと指摘し、称讃演説者が自分

の目的のために自由に作成することができた頌詞を支配者のプロパガンダの道具とみなすことはできないとするエネンケルの結論を支持している。

ただし、危険な要素を孕んでいたこの称讃演説が、実際には即位五年祭では披露されなかった点にも注意する必要があるだろう。多くの要人が出席する即位五年祭で王朝的な血統に言及することの危険に鑑みて、この称讃演説はアウグスタ・トレウエロルムの創設記念式典において発表するよう変更を余儀なくされたのである。演説者には比較的自由に作文することが許されてはいたが、政治的配慮には膝を屈する他なかったのである。

コンスタンティヌス大帝は即位五年祭に合わせて、ガリア人の都市であるアウグストドゥムに借金免除と五分の一程の減税を行った。頌詞の第五は、大帝のアウグストドゥムに対するこうした支援とそれに対する感謝を述べたものである。また、他のガリア人の都市に対しては支援が行われていないのに、なぜアウグストドゥムだけが支援を受けられたのかについても縷々説明されている。それによれば、アウグストドゥムは、ガリア人の都市のなかで初めて「ローマ人の兄弟」と呼ばれ、またコンスタンティヌス大帝の祖先クラウディウス二世ゴティクスや父親のコンスタンティウス帝との結びつきが以前から存在していたため、支援を受けるのに相応しい都市だったという。ただし頌詞の第五では、アウグストドゥムへの支援がもつともなことであり、釈明に都合の悪いこ

と、例えば、以前からガリア人がしばしばローマ人と争ってきた事実や、クラウディウス二世ゴティクスやコンスタンティウス帝が彼らへの支援をかつて拒否したことがあったという事実には触れられていない点に留意する必要があるだろう。

\*

以上が本書の大まかな内容である。編者のエネンケル自身がそうであるように、実は執筆者の多くが古代史を専門に研究している者ではない<sup>3</sup>。このため、研究史への目配りという点で粗が目立つのが惜しまれる。例えば、アテナイにおけるプロパガンダの再評価を行っている第三論文は、個々の状況における演説の機能や重要さを強調したものであるが、そこで主張されている諸々のことは、古代史家にとっては旧聞に属するものばかりである。また、第八論文では、剣闘士競技がこれまでプロパガンダとして見なされてこなかったと指摘しているが、しかし実際には剣闘士競技をプロパガンダの視点から論じた研究は少なからず存在する<sup>4</sup>。また筆者は論中で、当時の人々にとって剣闘士がモラルのモデルとして見なされていたと結論づけているが、筆者が取り上げていない史料のなかには剣闘士をネガティブに描いているものも少なからず存在するのである<sup>5</sup>。

本書が、プロパガンダの問題を正面から捉え、古代ギリシア・ローマにおける個々の事例の研究を行っていることは、十分に評価に値するだろう。古典古代の政治史をプロパガン

ダという切り口で考察することによって、これまで見過ごされてきた重要な論点が見えてくる可能性があるのは言うまでもない。その重要性については、編者のエネンケルが序章で繰り返し指摘しているところでもある。エネンケルは、近年のプロパガンダ研究が内包する問題点を鋭く指摘し、二〇世紀に形づくられたプロパガンダのイメージを安易に古代史に投影させることの危険性を説き、あるべきプロパガンダ研究のガイドラインを提示している点については、古代史家も学ぶところが多い。

しかし、こうしたせっかくのガイドラインが、本書の議論のなかで活かされているかと言えば、残念ながら否と言わざるを得ない。例えば、コンスタンティヌス大帝へ捧げられた頌詞を扱った第九論文は、称讃演説者にはある程度自由に頌詞を作成することができたという分析結果から、頌詞のプロパガンダとしての役割を否定しているが、これは、序章において編者が戒めている旧来の研究視座をそのまま踏襲したものである。すなわち、ナチズムやスターリニズムが権力中枢部において組織的に形成し一方的に押し付けた政治宣伝をプロパガンダととらえる二〇世紀的プロパガンダ観を前提にして、古代ローマの頌詞を定義しているのである。内容に危険な要素を孕むがゆえに称讃演説の場が変更されたという事実、「皇帝の意向の範囲内であれば」といった制限が付されていたという事実を鑑みれば、エネンケルのガイドラインに沿って、古代ローマの頌詞をプロパガンダという視点からあらためて

考察する余地は十分にあると言えるだろう。

また、各論文においては、史料の原文を載せるもの・載せないもの、史料の訳を載せるもの・載せないものがあり、体裁が区々である。更に、ミスプリントが散見され、通読をかなり困難にさせているということを最後に指摘しておきたい。

## 註

- (1) J. O'Hara, *Death and the Optimistic Prophecy in Vergil's Aeneid*, Princeton, 1990
- (2) Karl A. F. Enenkel, *Panegyrische Geschichtsmythologisierung und Propaganda. Zur Interpretation des Panegyricus Latinus V*, Hermes 128, 2000, 91-126
- (3) J. A. Lobur, Review of Bryn Mawr Classical Review, 2005
- (4) E. Flaig, "Entscheidung und Konsens. Zu den Feldern der Politischen Kommunikation zwischen Aristokratie und Plebs," in *Demokratie in Rom?: die Rolle des Volkes in der Politik der römischen Republic*, *Historia Einzelschriften* 96, 1995, 108-115
- (5) Cicero, *Philippicae*, 2.7, 63 and 74, 3.35